

プロミシユース解縛

小倉 武雄

第二幕

第一場。——朝。インド、コーカサス山中のうろわしい谷間。エイシヤ一人いる。

エイシヤ。空吹くすべての風からお前は降りて来た。

涙のかれた眼をうるおす涙を、ものうい眼によせあつめ、

憩を知るべきであった不幸な心に、絶えず

あこがれを棲みつかせる精気のように、思想のように、

お前は大嵐に育てられてやって来た。

5

お前は活気づいている、お、春よ！

風の多い季節の申し子よ！楽しかったが故に

今では悲しい夢の思い出のように、

お前は突然やって来る。天才のように、また、

人生のわびしさを輝く雲でつゝみ、

10

大地から立ち上るごとくに湧き出る喜びのように、

春よ、お前は突然やって来る。

今こそその季節、今日こそその日、その時間、

朝日のさすころ、いらっしゃい、長く待ちこがれながら

会うのが長く延びているパンシー、いらっしゃい！

15

屍を喰べる蛆虫のように、時間は何とのろのろしているのしょう！

輝く一つの星の光が、紫色の山なみのかなたの

明けてゆく朝のだいたい色の光の中のはるかかなたに、

まだちらちら光っています。風に吹きわけられた

朝もやの裂け目を通して、空の色よりも濃い色の湖が

20

その光を反射しています。星の色が淡くうすれるかと思えば、

谷間にねむる雲の波がうすれ、あや雲のもえる糸が

うす白い早朝の空にほつれるにつれて、また輝きます。

もう消えましたノそして、白雲のような雪をかぶった
向うの山脈の峯から太陽のうす紅色の光がきらめいています。

25

あの耳に聞える幽遠な音色は、くれない色のあかつき空にはばたく
パンシーの紺青の翼の音ではないかしら？

〔パンシー登場。〕

銀色の霧の中に

半ばかくれた星のように、微笑をたゝえて輝くかと思えば
すぐ涙ぐむあなたの眼を、わたしは感じます、見えます。

だれにも愛され、こよなく美しく、わたしの生命のよりどころの

30

あの方の面影をおびたあなたは、何とまあおそいのでしょうか！
まどらかな太陽はもうとっくに海の上に昇ってしまいました。
跡のつかない空気があなたののろのろした翼を感じる前に
わたしの心はあなたに会いたがってとても乱れてしまいました。

パンシー。ごめんなさい、お姉様ノわたしの翼は

35

かぐわしい花の匂がみちわたった夏の真昼の風の翼のように、
忘れられないのしい夢のために弱っていました。

神々しいタイタンが没落なさる以前には、いつもわたくしは
安らかに眠り、元気づいて、静かに目をさましたものでしたのに、
あの方の没落によってあなたの愛が不幸になり、

愛と悲しみが共にあなたの心になつかしいものになりましたが、
わたくしも次第にそれに慣れ、あなた達に同情することにより、
愛と悲しみはわたくしの心にも親しいものになりました。

40

そのむかし、わたくしは父なるわだつみの神の水色の洞の下の
緑と紫の苔のむしたうす暗い部屋で寝たものでしたが、

若い妹のアイオウニの柔かく白い両腕は

45

今と同じくその時も、わたくしの色の濃い

濡れた髪の下に深く交えられ、わたくしの閉じた眼と頬は

彼女の生命のかおりが匂い漂う閉じた胸の奥に押しあてられていました。

こうして、わたくしは昔と変わらず今もアイオウニと一緒に寝ますが

その後プロミシユースとあなたとの間の愛の

もっとも切実な、声のない言葉の音楽を運ぶ使の風、
 あなたがたの愛の仲だちの実体のない精となった今では、
 寝るときなつかしい夢を見ながら安眠出来ず、
 それから目ざめると夢に見ていたことも消えてしまうので
 心は苦しみと痛みで一杯です。

エイシヤ。 さあ目をあげて 55
 あなたの夢を解かせて下さい。

パンシー。 さきほどお話ししましたように、
 わたくしはアイオウニと一緒にプロミシユースの足もとで寝ました。
 あの山の霧は月の光をあびて語り合う私達の声を聞いて凝りかたまり、
 雪のしとねとなって鋭い針のような氷の上に敷きのべられ、
 わたくしたちが眠るのを護ってくれました。 60

それから二つの夢を見ましたが、一つは覚えていません。
 その一つの夢の中では、傷ついて痛み疲れた
 プロミシユースの肉体が消え、晴れわたる夜空は、
 本質は変ることなく精神的に生きている
 あのうるわしい姿のプロミシユースのために輝き、その声は 65
 ものうい頭脳を活気づけ身にしみる喜びで
 心をうっとりさせる音楽のように聞えて来ました。

‘お前の行くところ世界のすみずみまで愛でおゝい——
 エイシヤのほかは誰よりも美しく その面影をやどす——
 エイシヤの妹よ、目をあげてわたしを見なさい。’ 70

わたしは目をあげて見ました。するとあの不死の人の
 たえられないほどのうるわしさが愛のふんい気で包まれていて、
 それが、優美でうるわしいからだや、
 感動のために心もち開いた唇、敏感なうっとりした目から、
 もやのほのほのように立ちのぼり、朝の太陽の 75
 なごやかな空気が、一面になびいて動く霧の露を
 呑みこむ前におゝい包むように、わたしをとり巻き、
 そのすべてを溶かす力でわたしを溶かしてしまいました。

わたくしは見ることも、聞くこともまた動くこともなく、
彼の实体は溢れ出てわたくしの血液の中に流れ交わり、 80
わたくしの血潮は彼の生命に、彼の血潮はわたくしの生命となり、
こうしてわたくしは彼のうちに吸いとられ、ついに
彼の实体は抜け出して大気のようにひろがってゆき、
夕ぐれ時のもやが松の木立の上でまた凝って露となり、
きらきらふるえているように、夜が更けてから、 85
わたくしの存在も凝集したのを感じただけでした。
そして思考の光線がおもむろに結び集められるにつれて、
わたくしは彼の言葉を聞くことが出来ましたが、それは、
かすかな音楽の音色のように、しばらく消えかねていました。
わたくしは、声のない言葉で語られる夜どおしずっと、 90
なお耳を傾けていましたが、意味のわかりそうな言葉のうちで、
あなたの名前だけが数多くの音の中できゝとれました。
それからアイオウニが目をさましてわたくしに言いました——
‘今晚何のためにわたくしの胸がさわぐのか判りますか？
わたくしは、昔は自分が望むことをいつも知っており、 95
希望のかなう喜びをいつも味って来たものでしたが、
今では、わたくしが知りたいことはあなたに言えません。
わからないのです。憧がれることでさえ楽しいことですから、
何か楽しいものなのでしょう。あなたがからかっていらっしゃるのでしょう。
あなたは、何かある昔の魔法を見つけて、その魔法の力が 100
わたくしの心をわたくしが眠っているうちに盗みとって、
あなたの心と混ぜたのでしょう。わたくしたちがたつた今接吻したとき、
少し開いたあなたの唇の中に、わたくしを養なう香ばしい息と、
わたくしが使いすぎたために気が遠くなっている
生命の源のあつい血液が、お互に抱き合った 105
腕の間で脈うっているのを感じましたから。’
東の空の星の光がうすれて来たので、わたくしはこれには答えず、
あなたのところへ飛んで来ました。

花のつばみがぱっと咲くと、雪でおゝわれたスキチアの荒野から、
大地を寒気でぢぢませて、風がさっと吹き過ぎたのでしょう。
わたくしが見ると、花はすっかり吹き散らされていましたが、
ヒヤシンスの花びらにアポロの悲しみがしるさされているように、
どの花びらにもみなはっきり、続け／続け／と
書かれていました。

140

エイシヤ。 あなたの話をきいていると、
あなたの言葉は、わたくしの忘れた眠りをあとからあとから
いろいろの幻で楽しくしてくれます。わたくしたちは一緒に、
まだ夜が明けきらない朝早く、どこかの野辺を
さまよっていたのでしょう。深くたれこめた白い綿雲が
のろい微風に吹きおくられて、山なみの間を
おびたゞしく群って漂い流れていました。

145

黒い土を破ってようやく葉さきがのびたばかりの
草の上においた白露は、そのまま動かずそとしていました。
そしてわたくしが思い出せないことがもっともっとありましたが
紫色の山の中腹を斜によこぎる
朝の雲が消え去ったあとの影の上に、
続け／おゝ続け／と書きしるさされていました。

150

それから、露が消え散ったどの雑草にも、
枯らし凋ます火で書かれたかのように同じ言葉が読めました。
樅の木立の間に風が吹きおこって、その大枝をふるわせ
鳴りやまずざわめく音をおこし、やがて幽霊の
さよならのような、ひくく、たのしく、かすかな音が
聞えました、おゝ続け、続け、わたしに続け／

155

そこでわたくしは言いました：‘パンシー、わたしを御覧なさい！’
ところが、パンシーの愛らしい目の奥底に、
やはり見ました、続け／続け／

160

こだま。

続け／続け／

パンシー。 このよく晴れた春の朝に、わたくし達の声をまねて、

岩山が精靈のように言葉を発しています。

エイシヤ。 言葉を出しているのは、岩山のまわりの
何かあるものです。何と微妙な澄んだ音でしょう！よくきいて！ 165

こだまたち（姿見えずに）。

こだまの声をよくききなさい！

朝の露がきらめいて

それから消えてゆくように――

こゝにはながくないから。

わだみつの神の子よ！ 170

エイシヤ。 おききなさい！精達が話します。空霊な声の
流調なこだまがまだひびいています。

パンシー。 聞えます。

こだまたち。

続け、つゞけ、われわれの

声がうつろの洞を通りぬけ、

ひろがる森のその奥へ 175

次第に速く消えるとき。

（もっと遠方で。）

おゝ、続け、つゞけ！

お前があと追う歌声が、

野蜂も飛ばぬところで漂うとき、

うつろの洞穴をくぐりぬけ、

真昼も暗い森の奥を通り、

甘いかおりを放って眠る

ゆかしい夜の花や、水にさす

光をうつす洞穴のそばをすぎ、

たくまずゆかしいわれわれの音楽が 185

お前のやさしい足音をひびかせるとき。

わだつみの神の子よ！

エイシヤ。 あの声のあとを追いましょうか？次第にかすかに遠のいてゆきます。

パンシー。 静かに！今度は歌声が近づいて来ます。

未知の世界の深所に 190

前人未発の予言の声が眠っている。

お前がそこへ行くことよってのみ、

その声の眠りはさまされる。

わだつみの神の子よ！

エイシヤ。 まあ！吹きすぎてゆく風に乗って歌声が遠ざかります！ 195

こだまたち。

お、続け、つゞけ！

お前が跡追う歌声が漂うとき、

うつろの洞穴を通りぬけ、

林の深みの真昼の露路を、

森や湖水や泉のそばを、 200

嶺が重なる山なみを通りぬけ、

彼とお前が分かれたときに

烈しい衝激をうけたあと、母なる

大地が休息した山の裂け目や

深い谷まで。今また会うために。 205

わだつみの神の子よ！

エイシヤ。 さあ、パンシー、あなたの手とわたくしの手をつないで
あとを追いましょう。あの声が消えないうちに。

第二場。 岩と洞穴がまじりあった森。エイシヤとパンシーが入ってゆく。二人
の若い牧羊神が岩の上に腰をおろして聞いている。

精達の小合唱一。

糸杉に松にいちいの木、そのほかのどの木も

いつも変らずくろぐろと生茂っているそばの、

あの美しい二人が通っていった小みちは、

茂り合う枝葉で広い青空がかくれ、

太陽と月の光も、雨も風もその他のものも

5

枝さし交し葉の茂り合う木蔭を通れず、
たゞ露だけが、年経た木立の幹の間を
静かに低く地上を匍って吹きわたる
微風に追い払われて、緑の月桂樹の

みずみずしくも咲き出た日陰の花の

10

そのおのおのに真珠のような露を置き、
かよわく美しいアネモニの花の頭をたれさせ、
そのあと音もなく蒸発して消えてしまう。
あるいは、はるかにけわしい夜空をよじ登って
さまよい動く無数の星のうちの 하나가、

15

とゞまることなく速かに流転する
天球によって運び去られぬうちに、
み空から地上に光が落ちてかくれるための
たった一つの間隙を見つけたとき、
混じあうことの無い雨の糸のように
金色に輝く光線をまきちらす。

20

そしてあたりには神々しいうす闇がたれこめ
下には苔むした土地がひろがっている。

小合唱 二。

そこでは恋に酔いしれた夜啼鳥が

真昼の間もずっと眠らずおきている。

25

そして、甘い恋にうみつかれ、歡喜か悲哀に

圧倒された一羽は、風にそよがぬ

薦の大枝の間から、歌声にふくらむ
相手の胸に、ものうげにうなだれかゝる。

他のもう一羽は、最後の歌のしらべの

力弱い結びを、ゆらめく花から

聞こうと待ちうけ、やがて高いところで、

かよわい歌のふしまわしをかなで、

ついにある感情の主題が歌を生み、

森は、すみずみまでじっと静まり返る。 35
すると、ほのぐらい空からさらさらとひびく
翼の音が聞こえ、湖の中でかなでる
多数の笛の音のように、音響がきこえはじめ、
喜びもほとんど苦しみと思われるほどに
きく人の心に甘くたのしく満ちわたる。 40

小合唱 一。

そこでは、魔法にかゝった風の渦が
たのしい音を出すこだまを絶えずもてあそび、
デイモゴーゴンの犯しがたい法則により、
人の心を溶かす歓喜と楽しい畏敬の気もちで、
すべての精達をあの神秘の道にいざなう、 45
内陸の小舟が、山の雪解けに勢づいた
小川を下って大海におし流されるように。
そして、その法則はまずやさしい声として
談話や眠りに耽っている者に来て、
運命づけられたものをめざまし、やさしい感激が 50
彼等をひきつけ行動をうながす。洞察力あるものは、
翼をひろげて飛べとうながす風が、
生きている靈感を与える大地のかげから吹きおこり、
彼等をこちらの道へかりたてたと言うけれども、
彼等の持つ速く飛べる翼と足とは 55
内心のたのしい希望にふさわしいと信じている。
こうして彼等は中空の道に浮かび漂い、
やがて次第に勢をます音の波のあとから、
あの運命づけられた山の方に向って、
なびく空気のように突進するにつれて、 60
やはり楽しいけれども、さわがしく
活気にみちた音のあらしは、かりたてられ
追いたてられて吸いつくされてしまう。

第一の牧羊神。 森の中でこんな微妙な音楽をかなでる
あの精達の住んでいるところをお前は考えつけるか？ 65
わしらは何も訪れるものもない洞穴や、人里から
もっとも離れた草林をすみ家とし、こんな荒野は
よく知っているのに、あれらの噂はよく聞いても会ったことはない。
あいつらはどこに身をかくすのかしら？

第二の牧羊神。 むつかしくて決められぬ。 70
精達のことにもっともくわしいものが言うところでは、
水の澄んだ湖水や池の、泥でおゝわれた
底一面に咲く、青白くあえかな水草の花から、
太陽の魔法の力が吸いあげる水の泡が、
茂りあう木立の葉ずえを通して昼をめざます
みずみずしくうるわしい零囲気の下で、 75
あの精達が住みついておよいでいる天蓋だ。
そして、これらの泡が破れ、輝く天蓋の中で
精達が吸っていた火のように純粋な空気が、
夜空を流れる流星のように流れて昇ると、
あれらはそれに乗って急速な突進をおさえ、 80
その光り輝く頭を傾け、火となって
再び地上の水の下にすべりこませるのだ。

第一の牧羊神。 あれらの生活がそんなふうなら、ほかのものはほかの生
き方をさせてやれ。

バラ色の花の下とか、牧場のつりがね草の花や
濃い紫色のすみれのつぼみの中とか、あるいはまた、
そんな花がしばむ時の、いまにも消えそうな匂の上とか、
まんまるの露のきらめく光の中とか？

第二の牧羊神。 そのほかにも考えつけるものはたくさんあるが、
じっとこうじて話をしているうちにやがて午になり、
気むつかしいサイリーナスが乳を搾らぬ山羊を見つけ、 90
わしらのうらさびしい夕暮時をなぐさめ、

妬み心の無い夜啼鳥をうっとりさせてだまらせる、
運命や偶然や神や太古の混とんや、
愛や呪縛されたタイタンの悲しい罪や、それから、
彼がやがて解縛されて四海のものはことごとく
同胞になることなどの、かしくもうるわしい歌の
たのしいふしまわしを歌い惜しむだろう。

95

第三場。 山の中の岩の塔。エイシヤとパンシー。

パンシー。 わたくしたちは音楽に乗ってこゝへ——デイモゴゴンの
領域へ運ばれてきました。火を噴きあげる
火山の裂け目のような、この巨大な入口から
予言の蒸気が噴き出しています。孤独の人々が
若い時に踏み迷ってこれを呼吸し、
気を狂わせるいのちの酒を、真理、美德、
愛、真髄あるいは歓喜と思いまちがえ、
心ゆくまで飲み干して洵酔熱狂し、
狂信の歓声をわめきちらすミーナッドのように、
害毒を社会に伝染させる声をあげるのです。

5

10

エイシヤ。 そんな絶対者に何とふさわしい王座でしょう！ 壮麗な！
大地よ、あなたは何とすばらしいのでしょうか！ たとえあなたが、
あなたよりも一層美しい超自然の影にすぎず、
その精神が創造した大地を悪がけがし、
その精神もまた、それが創造した大地のように
美わしくか弱いものであろうとも、わたくしは
その精神も大地のあなたもひざまずいて崇拝できます。
今も心から敬慕しています。すばらしい！
妹よ！ あの蒸気のために心がぶらぬうちにごらんなさい。
下の方一面にわたって広がる波のような霧が
朝空の下で銀色に輝いて砕け、空色のうねりとなって
インドのある谷を湖水のように覆っています。

15

20

ござんなさい。この山の中復までは、葉が茂り花が咲いている森林、
 まだ夜がすっかり明けていない草原、中を流れる水が
 朝の光を反射してうす明るい洞穴、風に吹かれて
 奇妙な形になって漂う霧などにとりかこまれていますが、

25

霧は氷らせる風に吹きつけられて巻きあがり、ひと時の間、
 わたくしたちが立っている峯の頂だけ残して島のようにします。

はるかに、空を裂くように高く鋭くそびえている山々では、
 ある大西洋の小島からうちあげられる、波風の荒い大洋の

きらめく水しぶきが、輝く水滴で風を照らすように、

30

尖塔のような雪の峯が、まだ地上に昇らぬ太陽の
 光線に照らされて、あけぼのの輝く光を放っています。

この谷はこんな壁のような連山でかこまれ、

山々の氷解によって裂きえぐられた山峡から流れ出る

奔流のとどろきが、沈黙のように、絶えることなく、巨大で、

35

聞き耳をたて、いる風を飽満させます。まあ、すべり落ちる雪の音、

太陽の熱のためにゆるんだ雪崩れ、あらしのために

ひとひらひとひらあまさず篩い分けられて、大量の雪が

あそこに堆積しています。自由思想家の心の中に

古今の思想が蓄積され、ついに一大真理が解放され、

40

今この連山が雪崩れのために鳴動するごとく

諸国家にとどろきわたって根本から動揺するように。

パンシー。 まあござんなさい！ 荒れ狂う霧の海が、わたくしたちの

すぐ足もとで散って去って赤い泡となり、どこかどろどろの

小島のほとりで難破し、何も食べるものがない人々のまわりに、大洋が

45

月の引力で満ち潮になるように、こちらへ近づいて来ます。

エイシヤ。 ちぎれ雲がすっかり吹き払われ

雲を追いやる風がわたしの髪をみだします。

波のような雲がすぐ目の前を突進するので

目がくらみます。霧の中に幻が見えますか？

50

パンシー。 招くような微笑をたえた顔が一つ見え、

金髪の中で空色のあかるい焔が輝いています。

あとからあとから見えて来ます。静かに！彼等が話します！

精たちの歌。

無限の思想の深みへ

おりてゆけ！

55

感化を与える眠りのうす闇、

死と生の迷妄の争い、

また、仮の姿の世界の

事物の本質をはゞみかくす

もろもろの現象を通りぬけ、

60

もっともはらかなものの王座のきざはしまで

おりてゆけ！

音がうず巻く間に

おりてゆけ！

仔鹿が獵犬を、雷光が霧を、

65

ともしびが愚かな蛾を、

死が絶望を、恋が悲しみを、

時間が絶望と悲しみを、また

今日が明日をひきつけるごとく、

はがねが磁石にひきつけられるように、

70

おりてゆけ！

うすやみの空虚な混沌の中を

おりてゆけ！

空気が光を分けず、

月も星も輝かず、

75

洞穴をつくる岩は

み空の光をうけず、

地に影もおとさず、

普辺の唯一絶対の神がいる混沌の中を

おりてゆけ!

80

思想の深みの底へ

おりてゆけ!

そこには、雲間にこもる電光、

燃えさしの中に保たれている火の子、

恋心が忘れかねる別離のまなざし、

また、宝石ゆたかに蔵した暗黒の

鉱坑で輝く金剛石のように、

お前だけに与えられる超自然の力がかくされている。

おりてゆけ!

85

われわれはお前をとらえみちびくゆえに

おりてゆけ!

お前のそばの美しい人とともに。

心の弱さに逆らうな、

柔和の中にこそ、永劫なもの、

不死なものが、その王座の下にひそむ

蛇のような運命を解き放し、

生命の入口を通して現象界におくり出す

力がある。

90

95

第四場。 デイモゴーゴンの洞穴。エイシヤとパンシー。

パンシー。 あの暗黒の王座にべールにつままれて座っているのは何ですか？

エイシヤ。 ものべールは消えました。

パンシー。 おそるべき暗黒が支配者の

王座にみちわたり、正午の太陽からの光のように、

うす暗い光線が四方にさしているのが見えます。

目に見えず、一定の形もなく、身体もなく、

5

形態もなく、輪廓もありませんが、それでもなお
生きた精神だと感じます。

デイモゴーン。 知りたいことを尋ねるがよい。

エイシヤ。 生きている世界を作ったのは誰ですか？

デイモゴーン。 全能の神だ。

エイシヤ。 その世界にある

すべてのものを作ったのは誰ですか？思想、熱情、理性、
想像力などを？ 10

デイモゴーン。 神だ、全能の神だ。

エイシヤ。 春の風はめったに訪れず、

いとしい人の声が聞けるのは若いときだけ……

あの最高の美と愛を感じる心を作ったのは誰ですか？

その感じが心に再びたち返らないときは、 15

おれのうつろいやすさを感じない美しい草花の、

たのしい姿を見る目を涙でもらせ、人間の雑踏するこの地球を
淋しい場所のまゝにしておくあの心を？

デイモゴーン。 慈悲の神だ。

エイシヤ。 それでは、連続しておこる事件や思考の環から
分銅のようにぶらさがり、人間の心の中の 20

あらゆる思想に応じて重苦しく揺れ動くので、

人間は誰もみなその重圧にたえかねてよろめき、

死の誘惑に向って駆りたてられる恐怖、狂気、犯罪、悔恨などや、

捨てられてかえりみられない希望、増悪に変わる愛、

血よりもがくいとわしい自嘲、また毎日 25

きゝなれた言葉でわめき、いたましく絶叫しているのに

気にもかけられない苦痛、それから地獄やそのはげしい

恐怖などは誰が作ったのですか？

デイモゴーン。 ある神が支配する。

エイシヤ。 判るような気がします。誰ですか？ 30

デイモゴーン。 ある神が支配する？

エイシヤ。 誰が支配するのですか？まずはじめに天と地と
 愛と光がありました。次にサターンが現われ、
 そこから生命に深く嫉妬をふくむその幻の
 「時」が生まれました。サターンの支配の下では、 35
 地上の人間の状態は、風や太陽が萎ます前の花や、
 生きている木の葉の無心の喜びのようであり、
 人間は生活力の乏しい虫けらのようでした。しかしサターンは、
 人間が渴望してやまない知識や権力、
 自然の力を支配する能力、この神秘の世界を 40
 光で照らして見るように理解する思考の力、また、
 自治や愛の主権などの、人間生存の生得の権利を
 与えることを拒みました。それからプロミシユースが、
 力である英知をジュピターに与え、
 「人間解放」の法則を守ることを唯一の条件として 45
 広大な天国の支配権を彼に与えました。
 彼の支配とは、信も愛も理法も認めず、よるべもなく、
 たゞ自己だけが全能であることなのです。
 こうしてジュピターは今や支配しました。そして
 人類にまず飢餓が、次に心労が、それから病気や敵意や傷心や 50
 以前には存在しなかったけれども予見はしなかった死が
 知らないうちにひろまりました。それで、気候の不順な季節は、
 氷雪と炎暑で交互に苦しめて、すむのに家のない青白い人々を
 山の洞穴へ追いやらねばなりませんでした。
 そして、彼は、すさんだ人間の心に、はげしい慾望や 55
 狂気じみた不安、みかけだけ善いことの恋しい幻影をふきこみ、
 人間はそれらを争って戦争をおこし、こうして
 あばれまわって住いの場所を破壊しました。
 プロミシユースは人間が絶望して自暴自棄になるのを見て、
 一年中枯れない花のネペンスやモウリやアマランスなどの 60
 つぼみの極楽の花の中に眠っている無数の希望を、

人間の心の中に呼び醒まし、それらがせん細な虹の翼で
死の幻をおゝうことが出来、それから、愛を与えて、
人生のうま酒を生む人間の心のぶどうの木の、
ずたずたになったもつれをつなぎあわせました。

65

そして、彼は、人間の圧迫を受けていたずらをする
いけえにの動物のように、とてもこわいけれども愛らしい
火を征服しました。そして力の道具と象徴の鉄と金、
宝石類と有害金属、その他山の内部や
海の底に埋もれているすべての神秘なものを
無理やり自分の意志に従わせました。

70

彼は人間に言葉を与え、その言葉は全世界を
測るものである思想を生み出しました。

科学は天地の自然力に影響を与え揺り動かしましたが
その地位を奪うことは出来ず、また、完全に調和した精神は
未来の知識を予言する歌となって現われました。

75

そして音楽は、それに耳を傾ける人間の精神をふるいたせ、
人間の精神はついに神のように人間的心労を解脱し、
澄んだたのしい音楽の波の上に生存しました。

そしてまた、人間の手は、はじめは人体を写生しましたが、
後には現実の人体よりもはるかに美しい彫刻を創って
人体の顔色を失わせ、大理石は神々しいものとなり、
妊婦が彫刻の美に魅せられてながめ、生れた子供の容貌は
その熱情と彫刻の美しさを反映し、人はそれを見て恋いこがれます。

80

彼は、草根木皮や温泉などの秘められた薬効を教え、
病人はそれらを飲んで病がおとろえて安眠し、死は
眠りのように安らかになりました。また、空間を運行する
群星で作られた複雑な天体の軌道や、

85

太陽の黄道の変わり方や、うす淡い月が
つもごり時の海に明るい光をささないとき、
どんな秘密の魔力によって変るかなどを教えました。

90

そしてまた、生命がからだを調整するように、
 あらしのように速く走る船を導くことを教え、
 西方ヨーロッパ人はインド人を知るようになり、
 それから都市が建てられ、大理石の殿堂から 95
 おだやかな風が流れ、微妙な空気がきらめき、
 青い海とはるかにかすんだ山脈が見えました。
 プロミシユースはこのような状態の改善を
 人間にほどこしたために、空しくつながれて
 宿命の苦痛にさいなまれています。しかし、人間が 100
 自分の造った神のような創造物をながめて
 すばらしい物を考えているのに、その人間を、
 意気そそうした形骸、世間の笑いもの、うらぶれもの、
 見限られたもの、孤独なものなどに無理やりしてしまう
 手のつけられない疫病の悪を統御するのは誰ですか？ 105
 それはジュピターではありません。もちろん彼の敵プロミシユースが
 堅固無比のつながれの鎖から彼を呪詛し、彼が奴隷のように震えたとき、
 彼の怒りは天をゆさぶりましたけれども。さあ教えて下さい。
 悪を支配するのは誰ですか？それもまた奴隷ですか？
 デイモゴゴン。 悪を助ける人間の精神は汚れている。 110
 ジュピターがそのようであるかどうかはお前が知っている。
 エイシヤ。 それではあなたが神とお呼びになるのは誰ですか？
 デイモゴゴン。 わたしはお前が話す言葉で
 話ただけだ。ジュピターは生きとし生けるものの支配者であるから。
 エイシヤ。 悪に奉仕するジュピターの主人は誰ですか？
 デイモゴゴン。 もし混沌が 115
 それを伝える言葉をひらきあらわせたなら.....然しそれを伝える
 言葉はない。絶対の真理は形象のないものだ。
 回転する世界を凝視せよとお前に命じたところで
 何の役にたつだろうか？宿命、時間、原因、偶然、変遷を
 語れと命じたところで何の役に立つだろうか？永遠に変わぬ

愛のほかはすべて皆これらに従属しているのだ。 120

エイシヤ。 これまでお尋ねしたことは、かってわたくし自身の胸に尋ねてあなたの答えと同じようなことを直観していました。そして、この直観は、だれの心も予言か或は神託として感知しなければならない真理です。も一度お尋ねします。わたくしの霊が正しい尋ね方をすれば、直観的にはっきりと答えられるようにお答え下さい。今後プロミシユースはこのよろこばしい世界の太陽と仰がれるようになるでしょう。この運命づけられた時はいつ来るでしょうか？

デイモゴゴン。 あれを見よ！

エイシヤ。 岩が裂け、濃い紫色の闇の中を、ゆるやかな風を踏み虹の七色の翼のある駿馬にひかれたいくつかの車が見えます。そのどの車にも、きびしい顔つきの御者が乗って駿馬の飛行をうながしています。悪霊どもが彼等をそこへ追跡しているかのように振返っているものもいます。しかし輝く星のほかには何の姿も見えません。

またそのほかにも、愛したものが目の前を逃げてゆき、やっといまそれをとらえたかのように、目をかがやせ、からだをのり出し、大速力のために風と感ずる空気を口をひらいて呼吸しているものもいます。彼等の輝く頭髪は彗星の輝く尾のように流れています。彼等はみな急速に前進しています。

デイモゴゴン。 これらのものは、お前がお尋ねしていた永劫の時間の精だ。一人がお前を待っている。 140

エイシヤ。 一人のおそろしい顔つきの精が、その黒い車をそゝりたつ岩の割目のそばに止めます。仲間に似ぬおそろしい御者、あなたは誰ですか？あなたはわたしをどちらへ連れてゆこうと思うのですか？さあ、おっしゃい！

精。 わたしは、わたしの顔よりももっと恐ろしい運命を司る精だ。あの向うの遊星が沈まぬうちに

わたしとともにたちのぼる暗黒が、天の支配者の
追いのけられたあとの王座を、とこ闇の中に包むであらう。

エイシヤ。 あなたの言うことはどういう意味ですか？

パンシー。 あの恐ろしい精が、

150

その座から立ちあがります。地震でこわされた都市の

うす煙が海の上にたちのぼるように。まあ！

車が空にのぼります。馬がおどろいて突進します。

夜空をくらし、群星の間を進んでゆくでは

ありませんか？

エイシヤ。 これがわたくしの答です。奇妙ですね！

155

パンシー。 ごらんなさい。優美ですばらしい曲線模様が、

端の近くに刻みこまれた縁の内部で動きなびく

紅の炎をはめこんだように見える、象牙の車体が

もう一つ止まっています。その車を操っている若い精は、

おだやかな希望をそのままざしに示しています。

160

暗い夜空で光が昆虫をひきつけるように、

そのやさしい微笑はなんと心をひきつけることでしょう！

精。

わたしの馬はみな電光で養われ

旋風の流れを飲んでいて、

日の出の前に東の空にあかねがさすと、

165

地上をはなれ輝く日光を浴びている。

その速力にふさわしい体力をもっているようだから、

そのときわたしと共に昇りなさい、わだつみの神の娘よ。

望めば、速く走って眠る夜をめざまし活気づけ、

いぶかると、彼等は旋風を追い越し、

170

アトラスの山の頂の積雲が消えないうちに、

われわれは地球と月をかけめぐる。

われわれは午には仕事から休むので、
そのときわたしと共に昇りなさい、わだつみの神の娘よ。

第四幕。——車は雪をかぶった山の頂の雲の中へ進んでゆく。

エイシヤ。パンシー。そして時間の精。

精。

わたしの馬は夜と朝との境界で
いつも休息するのが習わしではあるが、
馳ける速度は焔よりも早いから、
希望の息を鼻づらに吹きかけ全速力を出させよと、
母なる大地は忠告の言葉を今さゝやいた！

5

エイシヤ。あなたは馬の鼻づらに息を吹きかけていますが、
わたしの息の方がもっと早く走らせるでしょう。

精。いゝえ、とても出来ません。

パンシー。精よ！一寸止めて下さい。この雲にみなぎる光は
どこから出ているのでしょうか？太陽はまだ昇っていませんのに。

精。太陽は午までは昇らないでしょう。日の神、
アポロは奇蹟によって天上にとめられています。そして
泉の上に垂れさがるそうびのあえかな色香が
水に浸みわたるように、この雲にみなぎっている光明は
あなたの偉大な姉から出ているのです。

10

パンシー。ほんとうにそんな気が——

エイシヤ。あなたはどうかしましたか、パンシー？顔色を変えて。

15

パンシー。あなたは何とまあお変りになったことでしょう！
あなたをととても眺められません。あなたを感じますが
見えません。あなたの輝く美しさに堪えきれないのです。
何かよい変化が自然力の中で作用していて、
それがあなたの存在をこのように現わさせるでしょう。

20

ニーリーデスの話によると、「あなたが生れたとき、

鏡のように澄みきった海が裂けて、
 あなたは縞のすじのついた貝の中に立ち、
 エーゲ海の島々の間や、あなたの
 名前で知られる海岸近くの
 晶明な海の穏かな水面を漂ったとき、 25
 太陽光線の雰囲気が生物の住む世界にゆきわたるように、
 愛があなたから放射され、大地も大空も
 深い海洋も陽のさゝない洞穴も、その他
 これらの中にいるすべてのものを照らしたのに、
 あなたの心から生れた悲しみがあなたの霊を蝕んだ。」と 30
 言いますが、あなたは今、その時のように輝いています。
 そしてわたくしも一人ぼっちではありません。あなたの妹、
 あなたの友、あなたのいとしい者であるばかりでなく、
 あなたの同情を求める全世界でもあるのです。
 あなたは全人類の愛を語る音楽が 35
 空中に聞えませんか？あなたは、あなたに魅せられた
 やわらかい風を感じませんか？ おきゝになって！ [音楽、
 エイシヤ。 あなたの言葉は、プロミシユースの言葉の反響のほかの
 どんな言葉よりも楽しいものです。しかし、愛は、
 与える愛も受ける愛もたのしいものです。光明と同じように 40
 愛はすべてのものに与えられるもので、そのなつかしい声は永久に飽きることなく、
 広大な大空やすべての物の生命をさゝえる空気のように、
 もっともいやしい生物をさえ神に等しいものにします。
 今のわたくしがそうであるように、愛をこよなくめざます者は
 幸福です。しかし、わたくしがもうすぐなるように、 45
 長い苦しみを経た後に、愛をもっとも深く感知するものは
 もっと幸福です。
 パンシー。 お聞きなさい！精達が語ります。

空中の歌声。

いのちのいのちよ！お前の唇はその間を通う息で
その愛を燃えた、せ、お前のほゝえみは
次第に消えてゆく前に、冷たい空気を 50
火のように熱くし、お前の目を見るものは、
誰もその魅力にひきつけられて
うっとりとなり、微笑の方は見えなくする。

光明の子よ！雲をおしわけて差す前に
雲を通して輝く朝の光のように、 55
お前の肉体は、それをおゝっているように見える
衣を通して光り輝やき、
お前が輝くところはどこでも
こよなく輝く空気がお前をつゝんでいる。

お前の美を反射する人間は美しいけれども、 60
その美の源のお前の姿は誰にも見えず、
あの流動する光輝がお前の姿をかくすので、お前の声は
もっとも美しいものにふさわしく、やさしくおだやかにひびくだけだ。
そして、わたしが常に悲しみ乍ら今感じるように
すべてのものはお前を感じるが決して見られない！ 65

地上の光明よ！お前の行くところはどこでも
お前のおぼろの姿は光輝でおゝわれ、
お前が愛する人々の霊は、神々のように
軽やかに風の上をあるいて行き、
そして、今のわたしのように、ついに力がつきて 70
目くるめき、みじめになるが決して悲しまない。

エイシヤ。

わたくしの霊は魅せられた小舟で、
じっと動かない白鳥のように、

- 音楽の澄み透る波の上に浮んでいます。
 そしてあなたの霊は、天使のように、 75
 小舟を操る舵のそばにいて、
 吹き交う風は心地よく鳴りひびいています。
 わたしの霊は、荒漠とした美しい所、
 山々や森や深い洞穴の間を
 まがりくねって流れる音楽の川の上に、 80
 永久に浮んでいるように思えます。
 そして、ついには眠りにつゝまれて海洋へ
 運ばれてゆく人のように、絶えずひろがる音楽の
 底の知れない海の中へ浮び下りたゞよいます。
- あなたの霊は、その間、あの楽しい天国を 85
 あほりたてる風を孕んで、翼をうごかし、
 音楽のもっとも静かな領域を飛んでいます。
 そして、わたくしたちは楽しい音楽の
 自然の本性にかられて、道もなく
 星もない遥か彼方へ進んでゆき、ついには、 90
 わたくしの憧憬の小舟は、もっとも美しい
 水先案内人のあなたに導かれて、
 人間の小舟が行ったことのない
 極楽の花園のような小島の間を通りぬけ、
 わたくしたちが呼吸する空気は愛であり、その愛が 95
 この地上のものと理想として感じるものとの調和して、
 風の中に、波の上に、動き漂う領域へ進みます。
- わたくしたちは、老令の情熱もさめはてた洞穴、
 壮年の悩みに溢れておちつきの無い湖水、
 青年の微笑のかげに裏切りをかくす滑らかな大海をすぎ、 100
 思い出の人々が影のようにおぼろな

幼年の心静かな淵を越え、
死と生を通りぬけてもっともうるわしい来世へ進み、
枝葉がひろがり、垂れさがって
咲き匂う花のために晴れやかな木蔭の、 105
輝く天使たちが住んでいる楽園や、
静かな緑の荒漠とした場所の間を
まがりくねって流れる水路の間を進んでゆき、
そして音楽の海の上に漂い、こゝちよい調で
歌っている、あなたに似た姿を見つけて止まります！ 110

第 二 幕 終 り。